
THE
Olympic Golf Club



JANUARY 2003 VOL. 7

島田 幸作プロを囲んで

出席者 島田幸作・大川 清
 槇野隆章・五嶋雅徳
 河合邦夫・川島好彦

日本ゴルフツアー機構のチェアマンとして男子プロゴルフツアーを牽引している島田幸作さんをゲストに迎え、大川会長と、オリムピックGCのメンバー4人が大いに歓談した。宝塚ゴルフ倶楽部の厳しいコースと素晴らしいメンバーに育てられた島田さん。グランドスラムなどツアー15勝のその技術論もさることながら島田さんを慕うプロたちの数の多さ、ファンへの心遣いの温かさなど島田さんの交友の幅や人柄が伝わる語らいの場となった。

まだ還暦前

- 大川 「島田プロとはなかなか会えないね」
 島田 「オリムピックに行くチャンスがなくて。今、月2、3回ですね、ゴルフ出来るのが。前から回ってほしい80。ハンデ5か6でちょうどいいかな」
 一同 「ワハハハハ」
 島田 「槇野さんには子どもの頃からお世話になりましたね。宝塚に入れてもらって今年で40年になるんです。17の終わり頃でしたから」
 大川 「まだ還暦になってないの？」(笑い)
 島田 「まだですよ。白髪はいっぱい出てるけど」
 大川 「白髪見てたら還暦のようだ」
 島田 「顔の艶もまだいいですよ」
 大川 「うん、顔は若い」
 島田 「大川さんは抜群にうまかった。いまでもうまいけど。尊敬しています」
 大川 「プロにそう言われると照れくさいですよ。島田プロの場合は本当に強かった。とにかく曲がらない」
 島田 「そりゃ、大川さんの方がもっと曲がらない」
 大川 「一緒に回ったらどういうテイクバックからどういうダウンスイングに入るのかよく見たが、なかなか出来なかった」
 島田 「ひとつには宝塚は小さなグリーンでしたから、ゴルフ場が正確なショットを育ててくれたんです」
 五嶋 「槇野さんも一緒だったんでしょ」
 島田 「僕に入れてもらったときは、もうクラブチャンピオンになられて。槇野さんは独特のゴルフをされてた」
 五嶋 「どんな、独特の？」
 島田 「フックのストロンググリップで飛ばされてた。しかも、ショートゲーム、アプローチ、パターがうまかった。だから、クラブ対抗の時も宝塚のメンバーで一番安定したスコアの読める人でした」
 五嶋 「若い頃？」
 島田 「30過ぎですかね。1963年頃です」
 五嶋 「河合さんはどういうご関係で？」
 河合 「不思議な関係で(笑い)」
 島田 「メンバーさんを通じてでしたかね」
 河合 「いつもお願いする一方で、スイングはもち



ろん、コースの攻め方まで全部聞いてくれてはって、全部甘えていこう思ってます。ハハハ」

- 島田 「逆ですよ」
 河合 「初めて宝塚を回ったとき、今もそうですが当時もっとめっちゃくちゃやったんです。それでも、島田さんが名刺の裏にシングル保証と書いてくれたはったんです。覚えてますか？ シングルならなかったらどないしよ思てました」
 島田 「よく飛ばされてた」
 五嶋 「忙しいのによくシングルになられた(笑い)」
 島田 「ゴルフ好きな方はほかの遊びやめてもゴルフのことに頑張りますね」

師匠は岡田卯一さん

- 五嶋 「川島さんは？」
 川島 「プレーは、ご一緒したことはないのですが、島田プロがその年の新人プロに『メンバーさんに教えないとダメじゃないか』と指示され、そのプロのレッスン第一号になった覚えがあります。また旭国際浜村温泉GCでのワールドジュニア選手権の時、色々話をしました」
 島田 「そう、インターネットの事を色々教えてもらいました」
 五嶋 「会長は宝塚で関西アマを戦われた」
 大川 「中部銀次郎と決勝やった。負けたけど」
 島田 「あ、負けられたんですか。新コースでしたか？」
 大川 「そう、新コース」
 五嶋 「会長は宝塚でよく2オンしたとか」
 島田 「本当に上手でした。フォームは学生のようにはいかなかったけど、理にかなった力強いゴルフでした」
 大川 「宝塚のキャディさんは島田プロと槇野さんの話で持ちきりでした。島田プロは何番で打つし、槇野さんは何番で打って2オンする、と。そういう話ばかり聞かされてね(笑い)。プロも槇野さんも強かった」
 島田 「槇野さんは見た目はやさしそうな顔しててね。なかなか勝負強い」
 五嶋 「僕は握ったら毎回やられてます」(笑い)
 島田 「相手に勝てそうな気持ちにさせといて、終わったら……」
 五嶋 「最後はね」
 槇野 「島田プロとは10歳違うんですが、最初からうまかったですよ。素質とセンスですぐにプロになった。のべ何百人とプロになりたい人が来てたのに別格でした」
 島田 「なくなられた岡田さんというアマチュアの方とよくプレーしました。昼から来られて

「島田、回ろう」って。あの方のランニングアプローチとかパター、バンカーショットを見て、その球のとらえ方のイメージがずっと残ってました」

- 五嶋 嶋 「メンバーと研修生の一番いい関係ですね」
五嶋 野 「研修生は短かったですか？」
五嶋 田 「2年でプロになりました。その方に怒られていいマナーを教えてもらって、ずいぶんとよかったと思ってます。何も知らない時分ですから」
五嶋 嶋 「クラブチャンピオンかなにか取られた方ですか？」
五嶋 田 「関西アマに2回優勝して日本アマで決勝で負けたような方です」
五嶋 嶋 「ほうっ、岡田何とおっしゃるんですか？」
五嶋 田 「卯一さんです。グリーン近くのアプローチが抜群でした。60過ぎぐらいの時でした」
五嶋 野 「ぼくより30くらい上です」
五嶋 嶋 「生きておられれば90いくつ？」
五嶋 田 「おおかた100でしょ。明治30年代生まれですから」

生涯1、2のアプローチ

- 五嶋 嶋 「グランドスラム取られたのは？」
五嶋 田 「1976年ですから昭和51年の日本オープン」
五嶋 嶋 「それでグランドスラム。しかし、ひとつ取るのもすごいのに」
五嶋 田 「いやいや、運も良かった」
五嶋 嶋 「日本オープンはどこでやったんですか」
五嶋 田 「茨城県のセントラルGCというところで。関西プロ優勝をした後でしたからこれはどうしてもという目標は持っていました。5打負けてたんですが、1日中止になって月曜日に持ち越しになるなど運もあった」
五嶋 嶋 「なにか強く残っている思い出は」
五嶋 田 「14番終わった頃、見てたひとが『島田、並んだ』と教えてくれたんです。15番から気合い入るし、プレッシャーかかって、16番のアプローチは100回打って1回の難しさでピンそばにつきましたね」
五嶋 嶋 「ほう」
五嶋 田 「17番もいいアプローチしてね、その時は村上（隆）が自信もってプレーしてたからプレーオフになったら負けと思ってました」
五嶋 嶋 「トップは村上さんだったんですね」
五嶋 田 「ええ、チャンス来たからこれで優勝できるかなと思ながらの16番のアプローチは生涯の1、2でした」
五嶋 野 「僕（セントラルの）メンバーだったから知ってます」
五嶋 田 「そうですか。グリーン速くて」
五嶋 嶋 「おいくつの時のことですか」
五嶋 田 「31、2ですね」
五嶋 野 「一番最初に勝ったのが？」
五嶋 田 「日本プロです」
五嶋 嶋 「そうすると日本プロの時は20代で」
五嶋 田 「24です」
五嶋 嶋 「プロになって？」
五嶋 田 「4年目です」
大川 「そりゃもう、取るべくして取ったんです。一緒にラウンドしたらね、ドライバーもアイアンも曲がらない」
五嶋 田 「そんなにほめていただいて」

息を止めて打つ

- 大川 「独特な感性、島田さんだけが持っているセンスかな。島田さんの語録で言うと、ゴルフは曲げなあかん。左に、右に曲がる、その真ん中が真っ直ぐや（笑い）」
五嶋 嶋 「スライスとフックがどちらもかけられるようになったら直すときに、スライスが多くなったらフック気味に打つとか、そういう風にやっていると真っ直ぐ打てる。真っ直ぐ打とうとして合わせていったら、ちょっとブレーキがかかるから右左に行くんです。フック、スライス気味に打ったらそんなに曲がるもんじゃない」
五嶋 嶋 「耳が痛いですが」
五嶋 嶋 「ヘッドアップせんと思たらだめやとか、息をふっと吐いてからやるとか、それを意識したら振られへん（笑い）」
五嶋 嶋 「へえっ、吐いてからですか？」
五嶋 嶋 「息が止まっているところでスイングする事が大事と言うことですね。楽にして吸うたりしたらぶれも出てくる。それと、プロでも自分の間合いが崩された時は構え直して打ってます。遅れているとか急いでいるとかで打つとミスが出る。走ってから打とうとすると息のリズムが狂う。これを頭に入れといたら練習の参考になります」
五嶋 嶋 「なるほどね。トップで止めるんですか？」
五嶋 嶋 「いや、構えて動き出すところから」
五嶋 嶋 「たいがいの人は吸うてから打ってます」
大川 「1、2、3の人も1-2-3の人もいるが私の経験では、1を長くして2で打つ。息で言うたら1——が長くして息が止まっている。皆違うと思うんですが、私は1でテークバックを長く決めて2で打つと打てるんだ」
五嶋 嶋 「理想のタイミングじゃないですか。1で長く止まっているのがよらしいね」
五嶋 嶋 「今、タイミングと呼吸法を教えてくださいましたが……」
五嶋 嶋 「呼吸法は大川さんの方がいいと思います」
大川 「それでいいですか。私はそれしかできへん」
大川 合 「会長のトップは浅いですね。肩は回るけど」
大川 合 「腰を悪くしてからなお浅くなった」
大嶋 野 「島田プロは昔から浅い」
五嶋 嶋 「何でそうなったんか？ 岡田さんのを見ててなったんかな」
五嶋 嶋 「テレビで若い頃の島田さんを見ると、アドレスに入っていくまでに左の方をむいててだんだん最後は……」
五嶋 嶋 「あっ、向いてましたね」
五嶋 嶋 「僕も、左の引っかけが多いんですけど、フェード打つ練習しようと思って真似してた





んです。そしたら飛ばんようになった(笑い)

河合「あのアドレスの入り方、今でも一緒ですよね」

島田「途中で言われて初めて気がついたんですけど、当時、日本で一番フォームのきれいなプロで松田司郎さんという方がいて、西宮カントリーであった関西オープンに出てられたので、応援しながらフォームを見たんです。その時のメモ、まだ家にありますけど、僕はもう松田司郎になりきっているんです。ところが、どこでどうなったか、あのスイングなんです。えらい失礼なことです(笑い)」

島田「独特のね、ハハハ」

個性派プロと島田学校

五嶋「独特の人の方が、たとえば中村寅吉さんとか、強さがあるような気がするんですか？」

島田「個性ある方が最後には決め手を持っている気がしますね」

大川「パーマーも決してきれいなフォームじゃない、ニクラスも踏み直して打つ。僕は箕面で戸田(藤一郎)さんに教わったが、戸田さん、職人ですよ、中村寅吉さん職人、杉原(輝雄)さん職人、島田さん職人。みんな個性持ってる」

五嶋「何ででしょうね？」

島田「信念持ってる。練習量がすごい」

五嶋「練習といえば、島田さんはプロになる前後はどれくらい打ってました」

島田「他の人に比べたら少ないです。でも、朝6時から夜7時までには練習しました。疲れたと思ったらラウンドして、その方が楽ですから。精神状態がよくなって又練習。自分の夢でしたからしんどいとかはなかった」

槇野「島田さんは面倒見のいい人ですが、今の選手で個性の強いのは？」

島田「男子は少ないですね。女子は安井純子とか。キャディして、途中から研修生になって、体小さいけど泣き言言わずにずいぶん努力して、長持ちしてますね」

五嶋「島田さんの教え子というの？」

河合「島田会というのがありまして、先生をしたって集まる現役のプロがこんなにおんのかいな、というくらいいます」

五嶋「何人くらい？」

島田「20人ちょっとですよ」

河合「いや、遠方からも100人くらいですよ。その時に我々アマチュアも集まってチャリティーするんです」

五嶋「来年入れてください」

河合「ええ、寄付してください(笑い)。毎年チャリ

ティーの目標きめてね」

槇野「島田学校の優等生は、安井純子？」

島田「一番はね」

槇野「城戸(富貴)さんも」

島田「今年やっと藤沢美佐代がシード権をとりました」

五嶋「大迫(たつ子)は？」

島田「大迫はね、キャディやってて珍しくレッスン受けなくて1回でプロになってしまった。黙々と練習してました」

槇野「島田さんが打ってるのを見ては盗むだけです。教えてくれとか、甘えてくるわけでもない。じっとみてるんです」

五嶋「ほうっ」

島田「僕の一番よかった頃を参考にしていると思うし、非常に頑張り屋でしたから」

本は一概には

五嶋「見るという話ですが、僕は読んで勉強して、僕の家はゴルフ雑誌がいっぱいですわ。あれはよくないですか」

島田「あれはちょっと、誤解する部分がありますね。バンカーいうたらアウトサイドばかりだったり。合う人と合わない人がいる。誰か一人に当てはまればいいんでしょう」

河合「本と言え、いろんなプロの個性をとらえて解説した雑誌を出さばったんですね。イラスト入りで」

島田「あれ、いややったんですけど、知り合いに言われて……」

五嶋「どんなプロの？」

島田「いやもう、どのプロも出てますが、タイガー・ウッズや尾崎(将司)なんか名前の売れている選手が多く出てきます」

河合「ここを盗めとか、プロ選手のポイントをね」

事物は軽く見る

五嶋「オリンピックのメンバーになにかアドバイスを？」

島田「どっちにしても練習をある程度しないといけない。そして曲がることを怖がらずにスイングをしきる。バンカーがあったら必ず練習する。バンカー、アプローチ、パットはやってなかったらなかなか勘が戻らない」

五嶋「プロでもそうですか」

島田「期間が空いて、やってなかったら、なかなか」

五嶋「アプローチのコツはなんですか」

島田「上げるのと転がすのとあるんですが、転がせるんなら転がす方が楽だと思います。上げるのは練習しかない」

五嶋「ぼくはね、スコアの計算をするとガタガタっと。だからつけんようにしてるんです」

島田「そんな考え方がいいですね」





大川「ここにそんなことが書いてある。優勝しようと頑張ったりせず、物事を軽く見る、と」

五嶋「福翁百話ですか『事物を軽く視て始めて活発なるを得べし』。なるほど」

大川「真剣になりすぎるとスムーズなスイングができんもんね」

川島「おっしゃる通りですね」

大川「島田プロにひとつ聞いてみたい。私の場合は私よりへたな人に聞かれたら加減ショットをするなど、いう。30なら30、50なら50。それ以上飛ばないように構えをしてしっかり打てという。これは、間違ってますか」

島田「それでいいです。ぼくも100ヤード以内をピッチングウエッジで加減するのがへたでした。たまたま従業員がえらい開いたサンドウエッジを持って譲り受けて、思い切り振り切って自信つけました」

大川「自分の言うことが間違ったら困るから確認したわけで、加減するのが一番難しい。加減したらトップする。ハハハ」

グリーンは速く

五嶋「島田さんはオリムピック回られていかがですか」

島田「距離が落ちだしたから、上がりホール（16、17、18）が手こずるような感じするんですけど」

五嶋「17はロングですから。18がちょっと、しんどいときありますね」

島田「16も長いですね。後はきれいなコースで打ちやすいと思います」

大川「うちのコースは、手前からトップしたボールが運良くいってバーディーなんてことはない。花道があるけど馬の背になっていて両方のバンカーに流れる。短いホールは本当にいいボール打ってポーンと止まらなないと奥へ流れてしまう。グリーンも大きくは一面だがエリアが3つあってそのエリアに乗らんことには2パター、1パターはない。アバウトでやったらいいスコア出ない。そうすると苦情が来る（笑い）。今年の冬はティグラウンド、少し前に持っていこうと思う。そうしないと営業になれへん」

一同「ワハハハハ」

五嶋「グリーンはアマチュアには難しいという声があるんですが」

大川「よその重いところでやった人はびっくりする。私はグリーンを速くしないと不満なんだ。でも遅くした方がいいかな？ 営業政策上（笑い）」

島田「スコアだけ作るのならいいですけど、遅いグリーンは緊張感ない。緊張しながらプレーして終わって解放された時、よかったです」

大川「タッチが合えばなんぼ長いのも入りますね」

メジャーに勝つ選手

五嶋「全日空オープンで尾崎が優勝しましたが、30年前にも優勝してるんですね。こんなスポーツはほかにはないですね。島田さんはチェアマンとして日本のプロゴルファーのまとめ役ですが、日本のプロゴルフの夢を語ってください」

島田「世界レベルの選手が出てこないとい日本のゴルフ界はよくなりません。今年、丸山君（茂樹）は2勝目をあげたがもっともっと、青木（功）さんを越すような選手に出てほしい。それにはメジャーに勝たないといかん。それとプロゴルファーは、みなさんがあこがれるように普段の言動をやっつけていかないと」

五嶋「若いプロ、特に田中（秀道）なんかいつまでもサインしてくれますね」

川島「以前にプロの試合のボランティアで、マーカーをした時思ったのですが、携帯電話で平気で話す人や、家族連れで来て赤ちゃんが泣き出すこととか、観客のマナーが悪いと感じました。この点についてどうですか」

島田「大きい気持ちでいなきゃいかんでしょうね。角立てて言うたら見に来てくれる人少なくなります。プロの試合は窮屈だから行くのいややと思われたら困る」

画期的な大仕事

五嶋「河合さん、今日はいかがでしたか」

河合「いろんなことを勉強させてもらいました。いつも感銘しているのはゴルフの上手な年輩の方というのは年齢不詳なんですね。榎野さん、いつもいくつなんかなって思ってます」

五嶋「50インチのドライバー振り回してね」

河合「会長はいつまで70台で回りはんのかなあ。僕はこういう風に年取りたいですな」

五嶋「まさにその通りですね。この間会長が75か6で回ってこられた。お祝いしようかと言ったら、五嶋さん、しょっちゅうやっているからいい、といわれた」

大川「島田さんの今なさっている仕事、日本のゴルフ界の画期的なことです。ある時点でもたついている若い人をすくい上げるといふこの発想は彼じゃないと出来ない。心から頑張っていると祈ってます」

島田「ゴルフのおかげでいい方と知り合って、夢も叶えさせてもらいました。やるからには全力投球したい。お世話になったところへは恩返ししたい。頑張ってるなあと言われたらいいかな、と思ってます」

五嶋「ありがとうございます」



大川 清のひとりごと

「武士道、騎士道、ゴルフ道」

江戸中期、戦国の動乱時代を経て生まれた封建制度の所産である武士道精神は、素晴らしい日本人の美德として世界に誇れるものと私は信じている。正直、勇気、仁愛、礼儀、誠実、真実、名誉、忠実といった概念から人倫の道を説き、人の上に立つリーダーにとって不可欠な現代社会にも通じる重宝な精神をそれから読み取ることが出来る。英国の「紳士道」には、誠実、慈愛、勇気、自由の4ヶ条がありそのうちの2ヶ条が満たされたら紳士として認められる。さらにいうと、中世ヨーロッパのそれぞれの地域においても「騎士道」としてその精神が引き継がれ、現在も物事を判断する上での基軸になっていると考えられる。

終戦後、経済大国へと急成長した日本は物質的には豊かな国になったが、今日の世相を新聞、テレビ、雑誌などで見ると寒々とした事柄が目や耳に飛び込んで来ることが多く、心温まる話が少ないのは非常に残念である。戦前は、誠実で勤勉で責任感の強い思いやりのある素晴らしい日本であったのだが。道徳、倫理が問われる現代にもう一度「武士道」の心を政治、公的機関、経済、企業、教育、マスコミ、社会の基盤である家族などそれぞれの枠組みの中で見直されれば、明るくて楽しい将来を期待出来るのではないだろうか。

日本のゴルフ界は、バブル経済が過ぎて以来、不景気の長期化の影響も大であると推測されるが、エチケット、マナーを守らないゴルファーが目についたりすることはとても残念である。しかしながらゴルフは、社交場として、家族内のコミュニケーション、ジュニアの情操教育・社会教育、健康増進、老若男女を問わず一緒にプレーを楽しみながら長幼の有序をわきまえる社交儀礼が身につく素晴らしいスポーツである。「ゴルフ道」のなかにも「武士道精神・スポーツ精神」が甦ることにより、これからの日本のゴルフが健全なスポーツとして国民に認知され、ますます普及してほしいものだ。そして、人々の気持ちに余裕が生まれ、家庭も社会も国も平和で豊かになり、二十一世紀が輝かしい世紀になることを祈っております。